

アメリカ合衆国強制収容所内の 短詩型文学覚書 — 「川柳しがらみ」考

糸井輝子

はじめに

「川柳しがらみ」は、清水其蝸（丁）を主な選者とし、第二次世界大戦のさなか、日系人戦時強制収容所で発行された。吟社名の「しがらみ」とは、席吟の選者も務めた山中桂甫（Roy 隆一）によれば、百人一首の「山川に風の掛けたるしがらみは、流れもあえぬ錦なりけり」から採る。「何も悪い事をしない我々日系人が戦争のお陰で市民、非市民を問わず西部沿岸から強制収容された事を詠んでいます。政府の政策に唯々諾々として従った姿を錦に喩えたのです」と桂甫は回顧している¹。

当初はジェローム強制収容所（Jerome War Relocation Center）で発行され、同収容所が閉鎖され、選者の清水其蝸がヒラリバー強制収容所（Gila River War Relocation Center）に移送されると、そこで「比良志がらみ」として新たに発行された。資料的には後述するように不完全ではあるが、一人の選者を中心に、一つの吟社として、移送された収容所でも再開、継続した川柳活動として異色である。また清水其蝸は、戦前、戦中、戦後のアメリカの川柳の指導者の一人であり、とくに戦後のロサンゼルス川柳を方向づけた人物である。本稿では、選者であった其蝸の川柳観も含めて、資料紹介する。

最初にジェローム収容所時代の「川柳しがらみ」、ついでヒラリバー時

1 Roy Yamanakaより筆者宛2001年6月24日付書簡。

代の「比良志がらみ」について、紹介し、其蛸の川柳観を考察する。最後に其蛸が選んだ川柳を列記する。

ジェローム収容所時代

ジェローム時代の「しがらみ」の資料には、鉄筆を切った山中桂甫が1994年、自身が保存していた「ジローム文芸協会 しがらみ吟社」句会記録をワープロ打ちして再版したのがある²。本稿ではこの資料を山中版と呼ぶ。レター用紙に126頁である。これに表紙と後書きが加わる。表紙には、毛筆のような字体で、「一九四三年 ジローム文芸協会 しがらみ吟社 山中桂甫選」とある。「文芸」の「芸」という文字が旧字体でないことから判断すると、1943年当時のものではない可能性が高い。毎回記録が作成され、発行されていたとするならば、句会毎にページが新たになっているはずであるが、山中版では連続している。新たに入力された点を考えると、内容が当時のままであるのか、あるいは桂甫がワープロ打ちの時に編集したのか否かについては、不明である。おそらく後者であろう。本稿ではこの山中版に依拠して考察する。

山中版の121頁には、「しがらみ第6号の編集が遅れていますが、近々お別れ号として特集いたすべく・・・」とあることから、同人誌の体裁をもつ冊子体の「しがらみ」が少なくとも5号までは刊行されていたと推察できる。残念ながら未見である。

山中版は第11回1943年1月10日から始まり³、第50回（1943年10月⁴）まで

2 白百合女子大学研究奨励費（平成10年度～平成12年度）「アメリカ文化における“封じ込め”—文化的諸相にみられる“封じ込め”の問題に関する基礎的研究」による研究助成による調査で、当該資料を入手した。

3 『ユタ日報』によれば、1942年11月11日開催の「ジロム川柳」句会の句抄が、16日、20日に掲載されている。其蛸らがサンタアニタ仮収容所（Santa Anita Assembly Center）からジェローム収容所に送られ、11月までには句会が催されていたことを示すものである。サンタアニタ仮収容所での「馬小舎川柳」に関しては、拙著『唇を噛んで試練へ血を誇り』川柳が詠むアメリカ強制収容所 佐々木みよ子、土屋宏之、糸井輝子編著『読み継がれるアメリカ：「丘の上の町」の夢と悪夢』（南雲堂、2002年3月）213-244参照。

4 日付不明

の記録で終わっている。山中版の「後記」によれば、サンタアニタ仮収容所からジェロームに移送された直後に、しがらみ川柳吟社の句会活動は始まった。児玉八角（清）とともに、シアーズのカタログ販売で謄写版を30ドルで購入し、1月から句会の記録が謄写版刷りになったという。謄写版刷りになってからの記録が山中の手元に残ったのであろう。桂甫がツーリーレーキ隔離収容所に移送された後の記録は山中の手もとにはなく、山中版はここで終わっている。

山中版をみると、席題と課題句がある。清水其蛸が体調を崩し入院した時を除き、課題句の選者は清水其蛸である。句会での席題の選者には、山中桂甫、児玉八角ら、戦前から活動していた「若手」が担当している。課題句の後に、選者による「選後」が記されているときもある。課題は、選者が出すものとは限らなかつたようである⁵。川柳句会誌につきものの、随筆や、編集後記などはない。目次もない。また、14回句会の項には第14回には其蛸による添削講座を設けることが告示されているが、山中版にはその添削記録はない。

しがらみ吟社の句会はメンバーの「自宅」で行われることが多かつた⁶。吟社のメンバーは、清水其蛸、青砥疎影、白井0目、小山岳南、高吉高志、奥村志洋、佐原四棋、横山衛門、池内和代、脇地閑水、藤井阿恵、渡辺雅楽、大河内抱星、神谷抱春、永見抱月（哲男）、大平弦月、大恵孤舟、本田露角（修作）、真田桔梗、山口鶴嶺、小林小鳥、丸山アヤメ、渡辺弓波、最相清、壬生てい子、杉山龍雲、並木烏水、児玉八角、山中桂甫の名が18回句会記録の後に列記されている。景山弓翠（精）や角素子らの名前が記載されていない。上記の他にも増減はあつたはずである。集会は毎日曜午

5 12頁、第13回ジェローム川柳、課題「私生児」のコメントに、「出題者は誰だったかわすれましたが、それもよからうと同意したからには全責任は私〔其蛸〕にあります」とある。

6 ときには「英語学校」や「リクリエーションホール」でも行われた。

後、26回句会のころには、毎回投句者40名余、集句120を超えると、選後のコメントに記されている。

定例会句会の記録の他に、最初の頃には「流転題詠／雑詠」の記録がある⁷。この「流転題詠／雑詠」には、他の収容所からの選句もある。サンタアナ仮収容所のときから、「流転川柳」は継続していた。そのためもあってか、其蛸は「流転川柳」の質を保つことにこだわっていた。16回の課題「私生児」では、応募句の質が低いので、流転川柳には出せないと述べている（12頁）。また、応募句の25%程度しか採句していないとも述べている（20頁）。後述の「比良川柳志がらみ」における其蛸の説明に依れば、「流転」とは、「流れ流れる水草の如き我等の現在、即ち特殊環境に在る人々の雑感を云ふ」のであり、「流転雑詠とは吾人が其の日其の日の感情の告白、生活の記録であります」という（2巻4号）。課題によらない「流転川柳」の雑詠こそが、強制収容所生活の「生活詩」であると其蛸は見なし、重視したのである。

しかし、やがて山中版からは流転川柳の欄は消え、各地からの川柳も課題句に掲載されるようになる。

句会数では、「ジロームしがらみ吟社」作品と、「ジローム川柳」作品が同一欄に掲載されているが、前者は後者よりも回数が一回多い。しかも、「ジローム川柳」は、1943年7月25日から「しがらみ川柳」へと名前が変わっている。説明はない。

課題のコメントは、其蛸らしく、辛口で短い。それでも、第12回課題のコメントには、「バラック総出の薪切りのためにタイムがなかったから本週句会は延期としたが土曜日の夜（二十三日）午後七時半より六—十二—Eにて催します」のような記述もあり、収容所の生活が垣間見える。

5月のころまでには、収容所の生活も安定し、他収容所との交流も盛ん

7 「流転川柳」第1回の記録が、『ユタ日報』の1942年12月28日に報じられている。

になってきている。他吟社の課題を報じるだけでなく、他収容所の柳人の訪問なども記録されている。たとえば、5月16日の句会の項には、ローア収容所から国次史朗の訪問と、マンザナ吟社、ローア吟社、ポストン文芸協会の課題も掲載されている（59頁）。

ヒラリバー収容所時代

ヒラリバー収容所での「比良志がらみ」は、2巻4号（1944年9月15日）、5号（10月15日）、6号（11月15日）、7号（12月15日）、3巻4号（1945年4月15日）、6号（6月15日）がカリフォルニア州サンディエゴ市の Japanese American Historical Society of San Diegoに保存されている⁸。謄写版刷りである。2巻4号は表紙に砂漠の風景が描かれ、「川柳志がらみ」とある。2巻6号からは、「川柳志がらみ比良」となる。

2巻4号の編集後記によれば、この号が、「柳誌が当センターに移ってからの最初の編集」であるという。同「巻頭言」によれば、2巻4号が通号11号であるというから、ジェローム収容所では10号までが刊行されたことになる。

2巻5号による、「志がらみ会則」には、

- 投句さへせられたら誰でも「志がらみ」会員であります。
- 会員は維持費として一ヶ月金二十五仙見当で会費を納めて下さい。
- 会員には月刊柳誌「志がらみ」を送ります。
- 会員で二ヶ月以上投句せられないと送本を中止するかもしれません。
- 会員は雑詠十句程度、題詠五句程度、添削一句、随筆、（六〇〇字以内）

⁸ 本資料の入手にあたっては、2010年度～2012年度科研費の助成を受けた。基盤研究（C）課題番号22510276。

及び漫談小説、何でも御投稿を歓迎します。

○会員は誰でも社人となれます。

○社人たらん人は社人吟五句以内を自選する事、従って社人吟は無選。

○社人は「川柳志がらみ」の編輯、財政、劃策、其の他全般に亘って参与する義務と権利があります。(42)

とある。部数は4号150部発行、5号は200部に増した(43)。

2巻4号は、表紙絵は島蒼洋、絵の枠外に「川柳」と書かれ、枠内に「比良志がらみ」とある。内容は「巻頭言」(清水其蝸)、「近作玉什」、随筆5編、「社中吟」、「流転雑詠」、「初歩添削」、「題詠」「消息」、「編集室」の45頁である。「会則」にあるように、随筆や創作も含む総合的な川柳「文芸誌」であった。

川柳に限ってみれば、主要メンバーの近作を数句ずつ掲載する「近作玉什」、同人の句集である「社中吟」、「題詠」、「流転川柳」がある。特色は、「流転川柳」の雑詠で、これは其蝸が選者になっており、各地収容所からも投句されている。

2巻5号では表紙が欠落しているが、体裁は前号とほぼ同じである。4号には特選があったが、5号の流転雑詠には特選はなかった。2巻6号の表紙は川柳志がらみ比良と書かれ、その下に収容所風景とさそりが描かれている。編集後記の代わりに「消息」欄が設けられている。流転雑詠集句617、採句200、特選はなかった。7号までには、一人一句掲載の題詠でも採句数100に迫る。質も向上した。「大概の故国柳誌に引けを取らない迄発展した」と題詠の「選後感」は自賛した。

3巻4号までには日本の敗色が濃厚になった。「流転雑詠」の「選後感」には「外患国土に迫り短波は死闘の大会戦を伝えてゐるクライマックスに突然内閣瓦解の噂を聴く」と、「焦燥と不安」にかられ、「悶々として」「や

るせない」と、日本を憂う心情が吐露されている⁹。「忠誠組」のヒラリバー収容所であっても、日本は故国、故郷であった。3巻6号の流転川柳雑詠の「選后感」では「徒に焦慮心配するよりは、此の特殊生活の記録を戦後に残さなければならぬ」と其蛸は論している。

其蛸の川柳観

「川柳しがらみ」では、主幹的役割を担ったのは清水其蛸であり、彼が主たる選者であった。その川柳観を知ることは、「川柳しがらみ」の性格を知る上で重要であろう。

其蛸は、山中桂甫によると、三重県出身、士族の出で第一高等学校卒、シアトルに入り、スクールボーイをしたが、青雲の志は果たせず、日本の家族とも連絡をとらなかったという。川柳は其蛸自身によれば1903年に始めたという。戦時転住局（War Relocation Authority、通称WRA）個人資料によれば、1908年渡米、ジェロームでは山中桂甫、児玉八角らと同室だった。シアトル時代に、北米川柳互選会に参加し、1938年にロサンゼルスに南下した。

其蛸によれば、1938年夏ワシントン州シアトルからカリフォルニア州ロサンゼルスに南下した当時のロサンゼルスの川柳、あるいは1942年春に強制立ち退き・収容されたサンタアニタ仮収容所での「アニタ柳壇」では、「狂句やら駄洒落やら、教訓・報告・説明川柳等々が大部分」であって、「前途暗澹頗る心細く思った」という¹⁰。川柳吟社活動としては、ロサンゼルスよりも先輩格であったシアトルで、柳人としての名前を確立し、「テクニカル川柳家として北米ナンバーワン」と形容されていた其蛸が、後進地ロ

9 1945年4月8日付

10 「今や〔1943年6月〕本格川柳の百花繚乱なるの盛況」だと続けている（山中版74）。

サンゼルスで指導的立場に立ったのは当然であろう¹¹。

指導は「率直」、あるいは「きっぱりした物言い」だったという¹²。「選後」のコメントから、その内容を見ると、山中版では私生児という題に対して、人間の醜の部分をとさらに取り上げた川柳が多かった点を課題の失敗だと反省し、「人生の暗黒面を掘り出すのを川柳の皮肉と思っている人がありますが、常に申し上げる通り醜を美化するところに現代川柳の大衆詩たる使命があります」と説いている。そして、「家庭内で発表出来ない卑猥な句は頂かない」と苦言を呈している（山中版12頁）。其蝸は、狂句的な句を戒めたのである。

題に関して其蝸は、「意味を広く解する」と指導していた。しかし、題から連想される内容であれば何でも良いとは考えていなかった。「虫」という題から、「虫追いや」と詠んだ句を、「題を見詰めない句」だと断じている。そして「題を広く解すると言う意味は題を刺身のつま程度に詠みこんであれば宜しいという意味ではありません」と苦言を呈している（山中版53頁）。

さらに、「草」という題に関して、「道草・草履・草疲れる・締縄等の句」は、草からの連想であったとしても、草から造ったもの、あるいは草を入れた言葉であって、「草」そのものではないので、「草」という課題に対しては答えにはなっていない、と批判した。「何時も申し上げる通り題を忠実に見詰める事」が重要だと論している（山中版65頁）。言葉から連想を次々に展開して無理に作句するのではなく、自己の生活のなかから課題そのものに沿った経験を思い起こし、作句することを求めたのである。

其蝸は、川柳を社会上層の「暇人」のものではなく、「大衆詩」である

11 山中桂甫「其蝸師を憶う」『川柳つばめ』1960年11月15日；『しがらみ』2巻4号（1944年9月15日）；『川柳きやり』1940年10月号38。

12 景山精、2003年8月1日、面接取材；実藤素子、2003年8月4日、電話インタビュー。

と考えていた。そして江戸時代や明治期の「大衆」は現代の「大衆」と異なるのであるから、結果的にその「大衆詩」も異なるはずである。「大衆詩川柳は大衆の歩みに遅れてはならない」と、時代とともに川柳も変化すべきだと主張している。さらに、「百尺竿頭一步を進めて、吾等は須く明日の大衆を対象としてその生活と感情とを詩化する様、善導する事が、川柳人に降された使命ではあるまいか」（2巻5号1-2「明日に生きる」）と川柳の「使命」を語っている。

其蛸はすでに『川柳鈴蛇』でこの川柳「大衆詩」説を展開している。そもそも川柳や俳句で号を用いるのは、その人がもつ社会的属性から離れることを意味する。現代人が自らを「大衆」と規定するとき、それは貧富差や社会的地位など、人間を差別化する属性を自ら排除することを意味する。「大衆」の一人となり、一個の人間として、「真面目に生活を見詰め、率直にその感情を披瀝すれば現代川柳が生まれる」のだと其蛸は説く。そのように「川柳が生活の記録、感情の詩である限り、明和・宝暦の生活、寛・天保の感情と現代人のそれとは雲泥の差がある」と、其蛸は指摘する。ここで其蛸は古川柳からの脱却を目指す。身分制度に縛られ、遊惰に流れていた江戸期との時代差を説き、江戸期の庶民には重要であったかもしれない「皮肉」「穿ち」「滑稽」の要素の必要性を再検討し、川柳の重大要素と見るべきではないと主張している。そして俳句は自然を、川柳は人事を、俳句は客観を、川柳は主観をとという区別さえ不要だと主張するのである（『川柳鈴蛇』2）。あくまでも日々の生活を重視し、生きることから発する感情を反芻し、川柳の約束事に則り、五—七—五にまとめることで、「詩化」される。結果として笑いがあってよい。けれども、最初からそれを目指す物ではないというのである。

そのため、文字遊び、だじゃれ、卑猥さも、生活への真面目な態度ではないと退けたのである（『川柳鈴蛇』3）。さらに題材を歴史にとった「詠

史」も、本人の生活の記録ではないとして退けた（『川柳鈴蛇』3）。

生活に密着して、感情を素直に詠むということは、生の感情をそのまま吐露してもよいのだというわけではなかった。『比良しがらみ川柳』3巻6号の巻頭言「曳かれ者の小唄」のなかで清水其蝸は、現在の日本人移民の置かれている状況、強制収容所で敵性外国人として収容されている状況をよく考え、川柳を詠むときにも節度を求めている。まず其蝸は、毎号作家100名、1000余の投句に接していると、「全般を通じて不言不語の感情の流れを泌々と感受して、時局と川柳と云ふ事を再認識せしめられる」と、川柳が日々の生活感情を反映し、時局を雄弁に物語る詩であると実感すると述べている。其蝸は、さらに続けて、「殊にセンター閉鎖令が下つてからは出所者日々に相続き、隣も向も空家ばかり増えて、日毎捨猫の戸外で飢に泣くのを聞くと老いたる身にもセンチメンタルの涙をさそふ」と、政府の出所奨励策で、出所者が相次ぎ、収容所に寂寥感が漂う様子、さらに、日本の敗北が濃厚になりつつある戦局に、「我等は焦慮と寂莫とに身も世もあらぬ思のする時、我等の感情が作品の上に如実に顕れる事は当然すぎる程当然の事ではあるが」と認めつつ、それでもなお、否、それだからこそ、「我等は敵国外人として米国に在り、米国の粟を喰ひ、米国の空気を吸ふて生存して居る」点をわきまえ、「米国の国法に従ひ、国憲を重んじ、殊に米人の感情を害する様な言行を慎むべきは論を待たぬ」と諭している。そして、

思ふに肚に蟠る不平不満は大声で怒鳴り散らし、癩に障る奴は小口から殴り倒してやつたら感情にまかせて癩癩玉は解消し三年の溜飲も一時に下るには相違ないが、蓋し其れは力があつての話だ。腕も力もない奴が大言壮語するのは所謂「曳かれ者の小唄」で単に憐れむべきコメデーに過ぎぬ。

鉄柵中に監禁せられ、乞食生活を余儀なくせられて居る我々に何の力が

ある。

と、敵国人として、敵国の収容所に収監されている身であることを自覚すべきだと強く説く。投稿者の「中庸の説では我等物足らず」という句を引き合いに出して、「御説御尤もと喉迄は出るが、如何に感情の率直なる表示が文学の要諦だと謂つても、千尋の溪谷に架せる丸木橋を渡りつつある我等の現在では造次顛沛にも足元がお留守になつてはならぬ」と苦言を呈するのである。

最後に、其蝸は、「斯んな事を言ふ意は、半死の老耄の私が責を負ふてインターンせられる事を恐れる為ではなく、川柳その物、引いては日本短文学全般に亘つて累を及ぼす事を恐れるからだ」と述べ、当局の方針如何では、収容所の文芸活動が禁止される危険性を指摘して、自重を求めたのである。被収容者として当局の監視下にあるのだという現実を踏まえての注意である。

2巻7号の巻頭言「虚偽」のなかで、其蝸は「私は川柳を学び出して意外な収穫を得た。其れは森羅万象を正視する事が川柳の主眼だと感じ、自然と人生とを凝視すると如何に多く吾人の日常生活が虚偽で固められて居るかと云ふ事に気づいた事だ」と述べる。しかしその虚偽を排除できない自分を自覚し、川柳を通じて虚偽を除けたらそこで死んでも本望だと語っている。其蝸にとっては、川柳とは、自らの置かれた環境を直視することで生まれる詩である。川柳を作る作業で、「真」と「我」との落差を自覚する。その自覚から自己を律し、「真」に迫ろうとする努力が日々新たになる。2巻5号で其蝸が夢見た川柳による「大衆」を「善導する」ことも可能となり得るのである。其蝸にとっては、川柳とは、言葉遊びでも、皮肉でも、穿ちでもなかったのである。

其蝸にとって、究極の川柳は時代や場所を超えた「真」をめざすもので

あったとも思われる。目指すのは、技術的なうまさや流麗なことば使いではなく、誠実に生活に向き合うことだと説いている。其蝸は題詠の選后感や巻頭言とは別に、3巻6号に「至誠」と題する随筆を寄せ、「在米十万人の日本人の心の声」を川柳に詠むのだと説いている。「大君の御無事遙かに祈る日々（馬場春水）」が川柳のあるべき姿を示していると例示する。この句は、「川柳週題」で天位になった。川柳としては、技巧も、言葉の洗練もなく、上手な句ではないと其蝸は論じる。しかし、現在の戦況を案じる以外に何もできない「在米十万人の日本人の例外なき祈願」を率直に詠んでいる。「我等は此の老婆の至誠に泣かされると共に皇恩の無窮を感泣する赤子の至誠が一老婆に依つて川柳として発表された事を柳界の為に喜ぶ」と述べている。

其蝸の選句

では其蝸はどのような句を選んだのか、山中版により、ジェローム時代の「しがらみ」で最高点である「天」に其蝸が選んだ句を以下に記した。

しがらみ12回（1943年1月17日）

課題「フェンス」

天 なし

しがらみ13回（1943年1月24日）

課題「兄弟」

将来は兄に負けない気が起こり 芳春

流転題詠1回／しがらみ14回（1943年1月30日）

課題「数」

二度数え確かを笑う預金口 坪根茂里杜（グラナダ）

しがらみ15回／ジローム川柳14回（1943年2月6日）

課題「小鳥」

餌を拾う小鳥に神の声を聞き 滝川巴水（行太郎）（マンザナ）

しがらみ16回（1943年2月14日）

課題「箱」

捨て値段箱も言い足す野菜売り 白井0目

しがらみ17回／ジローム川柳16回（1943年2月21日）

課題「私生児」

天なし

しがらみ18回／ジローム川柳17回（1943年2月21日 [マ]）

課題「紙幣」

札束は警察にある酔いが覚め 小田中曲水（丈夫）（グラナダ）

しがらみ19回／ジローム川柳18回（1943年2月28日）

課題「絵画」

写されぬ記念へせめて持つ絵筆 滝川巴水（マンザナ）

しがらみ20回／ジローム川柳19回（1943年3月7日）

課題「泥 土」

踏みしめた土が目に沁む退院日 角素子（ヒラー）

しがらみ21回／ジローム川柳（回数無し）（1943年3月14日）

課題「造花」

精巧を誇る造花のうら淋し 青砥疎影

しがらみ22回／ジローム川柳21回（1943年3月21日）

課題「明日」

明日を見越した仕入れ靴を脱ぎ 白井0目

しがらみ23回／ジローム川柳22回（1943年3月27日）

課題「鉄」

天なし

しがらみ24回／ジローム川柳23回（1943年4月4日）

課題「滑る」

滑り出す汽車に引かれて友を追い 角素子（ヒラー）

しがらみ25回／ジローム川柳24回（4月11日）

課題「茶」

統制に色だけを飲むメスのお茶 本田露角

しがらみ26回／ジローム川柳25回（1943年4月18日）

課題「田舎娘」

父母います土と親しむ娘の日記 小田中曲水（グラナダ）

しがらみ27回／ジローム川柳26回（1943年4月25日）

課題「歌」

若人の数珠持つ歌がメスに充ち 白井0目

しがらみ28回／ジローム川柳27回（1943年5月2日）

課題「石鮫」

その手手でメスへ行かれぬソープ箱 難波桂馬（ツーラレーキ）

しがらみ29回／ジローム川柳28回（1943年5月9日）

課題「虫」

甲虫の角が仔猫を尻込ませ 疎影

しがらみ30回／ジローム川柳29回（1943年5月16日）

課題「日暮れ」

吾が日記余白を残し今日も暮れ 脇地閑水

しがらみ31回／ジローム川柳30回（1943年5月23日）

課題「皮または革」

苦難の日何時まで続く皮膚の色 脇地閑水

しがらみ32回／ジローム川柳31回（1943年5月30日）

課題「草」

此処からは郊外となる草の色 野田鏡水（ヒクルレスト）
しがらみ33回／ジローム川柳32回（1943年6月6日）

課題「薬」

天なし

しがらみ34回／ジローム川柳33回（1943年6月13日）

課題「投げる」

オレンジを投げて別れた西東 角素子（ヒラー）

しがらみ35回／ジローム川柳34回（1943年6月20日）

課題「汗」

巖然として軍服は汗を拭き 清水迷舟（計吉）（ローヤルオーク）

しがらみ36回／ジローム川柳35回（1943年6月27日）

課題「独立祭」

野へ山へ静かな町の独立祭 桑田一朝

しがらみ37回／ジローム川柳36回（1943年7月4日）

「白粉」

老嬢の白粉何となく淋し 大恵孤舟

しがらみ38回／ジローム川柳37回（1943年7月11日）

課題「淋しい」

空部屋の或夜は友と茶を啜り 清水迷舟（ミシガン）

しがらみ39回／ジローム川柳38回（1943年7月18日）

課題「畑」

天と地と相合う辺り畑が尽き 滝井鯉城（千尋）

しがらみ44回 [ママ] /しがらみ川柳39回 [ママ]（1943年7月25日）

課題「電灯」

主任医は端座電灯だけ青し 小田中曲水（グラナダ）

しがらみ42回¹³／しがらみ川柳41回（1943年8月8日）

課題「眼」

目の色は皆黒かった登録日 清水迷舟（ミシガン）

しがらみ44回／しがらみ川柳43回（1943年8月21日）

課題「真ん中」

等分に切る気で尺を取っている 市川土偶（縫三郎）（ミネドカ）

しがらみ45回／しがらみ川柳44回（1943年8月29日）

課題「表向き」

天なし

しがらみ46回／しがらみ川柳45回（1943年9月5日）

課題「不便」

駅までは二里の列車に障子鳴る 青砥疎影

しがらみ47回／しがらみ川柳46回（1943年9月12日）

課題「機会」

又とない機会を語るアルミ鍋 都地丘上（ヒルクレスト）

しがらみ51回¹⁴／しがらみ川柳50回（日付無し）

課題「深い」

閑水、阿恵、鯉城共選

以上の課題を通覧すると、「フェンス」（12回）、「兄弟」（13回）、「数」（14回）、「小鳥」（15回）、「箱」（16回）と、身近な小さな、ありふれた素材に眼を向けて、課題としていたと推察できる。忠誠登録問題が生じる春においても、直接的にこの問題を扱った課題はない。日常的な問題と推察でき

13 7月31日にはしがらみ41回 しがらみ川柳40回となっている。清水其鯛入院のため桂甫、八角共選である。43回は桂甫、八角共選である。

14 途中なし、頁数は連続しているので、山中桂甫自身が途中記録を保持していなかった可能性がある。

るのは、「泥、土」(20回)、「汗」((34回)、流行を扱ったと思われる「造花」(21回)程度で、時局を反映した課題や直接的に政府を非難した課題はない。

選ばれた句に関しても、収容所生活というよりはむしろ、戦前の日常生活を詠んだとも受け取れる句が、30回まで順番に眺めてみるだけでも、「兄弟」、「数」、「箱」、「紙幣」など数多く続く。「絵画」、「造花」、「茶」、「歌」、「石鯨」「日暮れ」は収容所の生活である。政府に対する批判の態度は、「絵画」や「茶」に感じられるが、声高な調子はない。「造花」や「日暮れ」は、あきらめのような悲哀が感じられる。31回から50回までみても、政府の強制収容政策を批判するよりは、「苦難の日何時まで続く皮膚の色」(31回)、「目の色は皆黒かった登録日」(42回)と少ない。

無関心であったというよりは、忠誠登録問題が非常にデリケートで、当局に対しても、被収容者間においても、扱いにくい、慎重を要する問題であったことを物語っているように思われる。

以下は、「比良志がらみ」で其蛸が選んだ特選句である¹⁵。

2巻4号

流転川柳 雑詠 特選

赤道の彼方へすまぬ猪口を伏せ	横田守平 (マンザナ)
放浪のダイス神技に似て振られ	児玉八角 (ツルレーキ)
出所する友に旧知の名を持たせ	三原吾以知 (茂) (ハート山)
勲章に隻脚かえて兵帰る	脇地閑水 (ローア)
封筒切返しましたと涼しさう	関五松 (ポストン)
釈放は名のみ柵から柵の旅	塩出大洲 (正一) (マンザナ)
鉄柵の刺はキャンプの内へ向き	小田中曲水 (グラナダ)
景品はドーナツが付くボンド買ひ	柴紫水 (クリーブランド)

15 特選句がなく、佳作が選ばれている場合には佳作を列記した。

何時からか自由の鐘に亀裂が入り 吉田魯牛（ヒラー）

志がらみ 課題「南洋」

天 南洋の夢とは別に父の年 早川美貴子（マンザナ）

2巻5号

流転川柳雑詠

特選なし 佳なし

志がらみ 課題「答案」

天 試された過去へ悔いなき答案紙 清水迷舟（ミシガン）

2巻6号

流転川柳雑詠

特選なし 佳なし

志がらみ課題 「落葉」

天 秋霜の日々に痩せてく原始林 脇地閑水（ローア）

2巻7号

流転雑詠

特選なし 佳なし

志がらみ課題 「乱暴」

天 発砲の話に出所是非の論 練尾静歩（清一）（ヒラ）

3巻4号

流転川柳雑詠

特選なし 佳

紫心章敵国人の親を持ち 平田紅鳥（正一）（アイダホ）

いたはられまいと淋しい笑顔する 児玉八角（ツールレーキ）

信仰が薄れた頃の日曜日 本田露角（ローア）

夢に見る迎の船の日章旗 吉村穂村（ツールレーキ）

出所して善かつた事になつて居る 浜口笛水（兵七）（ローア）

九段坂相次ぐ御魂想ふのみ	山中桂甫 (ツールレーキ)
知らぬ間にイエスと変へて消えちまい	瀧川巴水 (ツールレーキ)
会へるかも知れぬと朝の廻道	阿崎真澄 (朝喜万寿美) (ローア)
鬱の字を見るとウンザリする字引	天野兎氏 (ローア)
お医者様いちめてならぬ布令が出る	二階堂泫水 (ツールレーキ)
三年は官費で伸びた子の背丈	野尻南海 (信雄) (ローア)
始めてにしては上手として教へ	堰本花兄 (ヒラ)
横文字が読めてデスクの十九弗	今村仁逸 (ヒラ)
追々にキヤンプの夜が暗くなる	関五松 (ポストン)
さあ来いと空を睨んだ高射砲	白井九作 (ヒラ)
籠城をされては困る畑も閉ぢ	伊藤蘭女 (栄) (ヒラ)
戦場を訊けば寡黙の松葉杖	墨田真鶴 (ポストン)
濟まない気何処かに潜むピクニック	加藤真砂 (ヒラ)
菊の花造花でもよい手を合はせ	富永糸路 (ヒラ)

集句 1395 採句281

志がらみ課題 「程度」

天 極楽へ行ける程度で世を渡り 安武雀喜 (嘉一郎) (シンシナチー)

3巻6号

流転川柳雑詠 特選

無名草此処も出所の丈となり	児玉八角 (ツールレーキ)
知らぬ間に敵国人の子を育て	本田露角 (シーブルツク)
転住も間近校庭だだ広し	真田桔梗 (ツールレーキ)
笑つてる位牌代の子の写真	横田守平 (マンザナ)
ただ褒めて置きさへすればいい祝辞	平田紅鳥 (アイダホ)
道伴になつて噂の種を蒔き	白浜香雪 (ローア)

志がらみ課題「私語」

「比良しがらみ」の参照すべき巻号も少ないので、限定的な考察ではあるが、ジェローム収容所時代に比べ、強制収容所の生活や詠み手の思いが色濃く反映された内容となっている。とくに「流転雑詠」にその傾向が強い。其蛸の「流転雑詠とは吾人が其の日其の日の感情の告白、生活の記録であります」(2巻4号)という選考姿勢から考えれば当然であろう。ジェローム収容所時代の同人誌としての「しがらみ」が未見であるために、その時代の「流転川柳」と比較できないのが残念である。その一方で、ヒラリバー収容所時代では、其蛸が自重を求めているにもかかわらず、政府の収容政策に対する批判も強くなっているということは、没になった作品にはもっと批判が露骨だったのだろうとも推察できる。収容所生活に慣れ、政府の規制も緩んで、自主規制の気持ちが詠み手の間では薄れたとも考えられる。

むすびにかえて

本稿は、資料的制限のために論考は限定的にならざるを得なかった。それでも本稿を纏めたのは、強制収容所で詠まれた短歌・俳句・川柳などの作品が収容所の生活心情を記録している点、「川柳しがらみ」吟社が存在し、活動し、同人誌が発行されたが、現在資料が不完全である点を記すことで、新たな発見につながることを期待するからである。